

「チェルノブイリの子どもたち」

ヴァレンティナ・スモルニコヴァ (IPPNW 国際会議 2011 年度報告)

この会議に参加させていただき、チェルノブイリ惨事による健康被害についての私の考えを報告する機会を与えてくださったことを名誉に感じます。どうもありがとうございます。

私の名前はヴァレンティナ・スモルニコヴァ (Valentina Smolnikowa) で、1941 年に生まれました。私はリポフ (Lwow) 医科大学を卒業後、ウヴァロヴィッチ (Uwarowitschi) 病院とブダ・コシエルイオヴォ (Buda-Koscheljowo) 病院で 1966 年から 1969 年までの間に小児科医としてスタートを切りしました。その後、私はウラル地方の病院に 10 年間勤務し、1979 年に家族と一緒にブダ・コシエルイオヴォ (Buda-Koscheljowo) に戻りました。そして 2005 年まで働きました。私は今でもそこに住んでいます。私はこれまで管理職や研究職についたことはありません。私は一介の医者として地域の医療ヘルスケアに携わってきました。つまり、私の小さな患者さんとその親御さんと付き合いながら、私はこれまで生きてきました。

私は産婆さんと婦人科医と一緒に新生児の出産の面倒を見て、さらに入院してきた子ども、家にいる子ども、学校と幼稚園の子ども、村の診療所の外来の子どもの治療にあたってきました。

彼らが健康の時にも診察しました。病状が危機的になったときは、彼らの短期間の最後の瞬間を見守ることもありました。ブダ・コシエルイオヴォ村からの医療スタッフが引き上げた後も私は残って面倒を見ました。チェルノブイリから避難してきた子どもたちを私の医療上の知識と経験で助けようと思いました。これらの経験から私はチェルノブイリについて私自身の考えを持つようになりました。これらを私は隠したことはありません。

この 25 年を思い出し、これらの出来事を語るのは簡単ではありません。し

かし、決して忘れることのできない瞬間があります。私たちの地区に 1986 年にブラギン (Bragin)、ホイニキ (Choiniki)、その他の被災地から 1082 人の人々が避難してきました。ブダ・コシエルイオヴォ村には、チェルノブイリの 20 キロメートルゾーンに位置するスペリチェエ (Sperizhje)、クルユキ (Krjuki) などの村の住民が移ってきました。それぞれ高いレベルの放射線を浴びていました。

1987 年 6 月に 20 歳の若い 2 人の女性がスペリチェエから出産病棟にやって来ました。1987 年 6 月 18 日にアラ (Alla) が、6 月 27 日にオルガ (Olga) が出産しました。アラは妊娠 9 ヶ月で男の子を産みました。両肢とも内反足 (ステージ IV) で、心臓にも障害がありました。オルガには美しい黒髪の女の子が生まれました。この子には腰に腫瘍のような卵大の腫れ物があり、脚で立つことはできませんでした。椎間板ヘルニアだろうと母親に言いました。夢に見た最初の子ども誕生：チェルノブイリのストレス、移住も乗り越えたのに障害のある子どもが生まれました。私は心を鬼にして母親のところに行き、赤ん坊を見せました。そして、できるだけ落ち着いて彼女に聞きました：障害児センターに預けますか？母親は泣き始め、赤ちゃんを胸に抱きしめました。乳幼児は無邪気にも母親の乳房を吸い始めるのでした。母親は赤ん坊をもっときつく抱きしめました。

この後から、奇形や病気を抱えた子どもたちが次々に生まれました：四肢のどれかが欠けた赤ん坊、指のない赤ん坊、指がくっついている赤ちゃん、脳水腫 (脳浮腫)、硬いまたは軟口蓋、全盲、脳性麻痺、先天性心不全を伴う脊髄ヘルニア、心臓障害。しかし、一人の母親も赤ちゃんを他人に託さなかったのです。チェルノブイリは子どもたちから子どもにふさわしい喜び、若者らしい喜びを奪ってしまいました。さらに親や家族には喜びの代わり重い足枷をつけたのです。しかし、人間としての深い愛情と尊厳を育む事を教えました。特に母親に。

2 人の子どもは異なった運命の道を辿っていきました。内反足の男の子は不具者の靴が作られ、退院していきました。そして足の骨の変形の程度が低減されるように成長する足に合わせて新しい靴がいくつも作られました。彼は全身麻酔下で一連の重い手術を受けなければなりません。そして入院期間も長くなりました。彼は他の子どもたちのように足を動かすことができなかった上

に心臓は高負担に耐えられませんでした。彼は 7 歳で学校に通い始めました。彼は大きく育たず、しばしば病気になりました。彼は常に整形外科用靴を履いていました。大きな青い目とブロンドの髪でいつも笑顔で人に接していました。彼は恥ずかしがり屋だったが、友達がたくさんいました。学校の勉強は彼には難しかったようです。彼は若者の喜びを知ることができませんでした。20 歳の時に重いインフルエンザにかかり、肺炎になりました。腎臓も弱まり、2 年間にわたり血液透析（ゴメリ市で週に 3 回）を受けながら、苦しい人生を生きました。そして 2009 年 11 月 12 日に 22 歳で人生が何であるかを知る前に、家族を築くこともなく亡くなりました。

閉鎖脊髄円板ヘルニアを持つ少女は、ゴメリ市とミンスク市の脳神経外科クリニックで診察されたが、外科的治療はされませんでした。彼女は美しい娘に育ちました。学校に通わないで自宅で勉強し、学校を卒業しました。彼女は歩くことができないので、車椅子の生活をしています。誕生から今日まで、骨盤臓器は機能不全です。彼女は絵を描いたり、縫ったり、刺繍したりする才能があります。最近、彼女はコンピューターを使うようになりました。彼女を待っている運命はこれからも軽くなることはないでしょう。

2005 年の障害児リストには 140 人の子どもの名前が載っています。彼らのうち 84 人が 1987 年から 1994 年の間に生まれました。最も多い健康障害は先天性の骨奇形、神経系疾患、循環系疾患などです。後から見られるようになった症状ですが、1987 年から 1997 年にかけて生まれた子どもたちの中には甲状腺がん、腎臓、骨、糖尿病、聴覚障害、視覚障害および染色体異常が見られます。多くの悲しみと心配を彼らの両親と子どもたちにもたらしたのは、それまで健康であった子どもたちに白血病や悪性疾患が次々と襲ってきたことでもあります。

悲劇は、11 歳のタニヤ（Tanja）を襲いました。骨盤の骨肉腫と診断されたのです。大腿部の 3 分の 1 のところで足が切断されました。次に化学療法、松葉杖、人口義足が続きました。

ポタポヴスク（Potapovsk）校に通っていた、陽気で活発でとても成績の良か

ったスヴェタ (Sweta) は突然発病しました。発作による失神、腹痛、貧血。最初の血液検査と予備診断の結果：白血病。ゴメリ病院の血液学病棟小児科での治療。その後ミンスク診療所での治療。何回にもわたる化学療法。この病気との闘いはあまり長く続きませんでした。白血病と診断されてから、2年半後にスヴェタはこの世を去りました。

同じように白血病と診断されたのは、小さなリナート (Rinat) が1歳と8ヶ月の時でした。7ヶ月後に彼は亡くなりました。

セルゲイ (Sergey) は、クリヴスク (Kriwsk) 校の5年生の授業の時にひどい頭痛に襲われました。発作が起こった後検査したら、小脳に腫瘍ができていたことがわかりました。彼はまだ生きていますが、仕事もできず、家族もいません。

甲状腺がんが何人かに発病すると、さらに懸念の波が広まりました。最初は10歳のタニヤ (Tanja) と12歳のロンヤ (Lonja) でした。タニアはブダ・コシエルイオヴォ出身でした。ロンヤはチェルノブイリから20km以内にあるクリュキ (Krjuki) 村から家族と一緒にグビチ (Gubichi) 村に移住してきました。ミンスク市の病院でデミディチク (Demidchik) 教授の執刀で難しい手術が行われました。長いリハビリが終了した後も検査と治療が続きました。薬が効くときもあったが、効かないときもありました。これらの子どもたちと彼らの母親たちはそれまでの家族と学校で過ごした共通の生活から追い出されてしまいます。そして苦しみと儂い希望のはざまに投げ出されてしまいます。現在、彼らは成人になり、子どもができた人もいます。しかし、彼らの生活の質は満足いくものとは到底言えません。彼らはそれぞれ、神経系の疾患、心臓、消化器官の病気を抱えています。

ドラマチックだったのは、サボロチェ (Sabolotje) 村の3歳の少年パヴリク (Pavlik) の生きるための闘いでした。彼が目のがんと診断されると、非常に難しい、痛い治療が続き、さらに一連の化学療法が施されました。治療の後は、彼は歩くことができなかつたので母親が彼を腕に抱えて、家に帰りました。免疫力が急激に低下して彼は生死の境を数年生きました。彼は衰弱し、痛い治療の時に悲鳴を上げる力も残っていませんでした。白い仕事着の男の人が現れるだけで、彼の目には予想される痛みへの恐れが浮かび、無意識のうちに苦痛に満ちた声

をあげてしまうのです。母親に連れられて彼が処方箋や相談を受けるために恐る恐る病院に現れると、私はそのような彼を見ただけで可哀想になって胸が締め付けられたようになったものです。このような彼に付き添いながら彼の母親はどれだけ眠れない夜を過ごしたことでしょうか？彼女は、同様の病状の子どもたちがどのようにして死んでいったかを何度も見て来ました。あるいは治療のために息子が他の病棟に移され、彼女はこの治療により快方に向かうのか、または悪い結果、つまり死であるかもしれないと心配しながら、じっと待っていたのです。

今日私はほんの数人の子どものことしか話しませんでした。どれくらいの数のパヴリク、タニヤ、ヴァニヤたちがチェルノブイリから受けた、苦しみに満ちた生涯を過ごしたことでしょう。

この25年間、チェルノブイリは数知れない犠牲者を生み出し、その終わりは見えません。

近年、チェルノブイリによる新たな兆候が現れています。働き盛りの大人たちが死んでいくのです。チェルノブイリの事故後10～15年の間には健康で仕事に励んでいた大人や若い親たちが若い子どもたちを残して亡くなることは時々ありました。ところが最近の数字は我々を狼狽させています：ある統計によると、ブダ・コシエルイオヴォ地区で2010年に亡くなった770名の内の21.3%（ほぼ5分の1）は就業適齢期の人たちなのです。死因は心臓循環系、事故、アルコール中毒、悪性疾患です。彼らの子ども達にはどんな運命が待っているのでしょうか？

誰がこれらの子どもたちに世代の経験を伝承させるのでしょうか。困難な状況に陥った時に誰がこれらの子どもたちに救いの手を差し伸べるのでしょうか。通常は叔母、祖母、祖父、兄弟、姉妹などが、これらの子どもたちを引き取って育てています。しかし、母親の愛情とケア、父親の強さと信頼性は、これらのチェルノブイリの子どもたちからは永遠に奪われてしまうのです。家族や友人の愛とケアが十分であったとしても、母親と父親に代わってあげることはできません。これがいわゆる「平和な」原子力の低廉な代償なのでしょうか？

チェルノブイリが残した爪痕には非常に多くの顔があり、それらを語るには長い時間が必要です。

私は今日は子どもたちの健康問題に触れただけです。チェルノブイリは社会の道徳に壊滅的な影響を与えています：人間はしてはいけないことをしているのです。

私たちの地域では、次のことがはっきりと見えます：25年後もガンマ線で汚染された地域は汚染されたままであるということです。汚染度は弱まったが、ゾーンは次のように残っています：定期的な放射線管理がある地域、自発的な移住権利を持つ地域がまだあります。ブダ・コシエルイオヴォ地区には237の居住地（自治体）があり、その中にゾーンに指定されるべき214の居住地があります。つまり、その中に5,454人の子どもを含む35,168人の人々が住んでいます。1mSv/年以下（訳注：社会的、健康的に我慢できるであろうとされている実効線量値）の汚染地域に住んでいるのは、わずか23の村の536人に過ぎません。ということは、実質的にはすべての人々がそれ以上に汚染された地域に住み、汚染された土地の農作物を食べながら生活しているのです。

子どもを見ても大人を見てもあらゆる種類の疾患の増加が確認できます。統計的に見て他のカテゴリーよりも信頼できると思われる徴兵適齢期の青年に関する数値を見てみましょう。チェルノブイリ前の時代には青年の78-80%が軍隊に適していました。2010年秋の結果によると、358名の適齢者のうち139名（38.8%）のみが徴兵されました。さらに徴兵された若い男性の内でも34.6%は障害度1のために軍隊の重要な部門には適しないとされました。この結果はゴメリ州の平均よりもさらに悪いのです。

死亡率は増加し続ける反面、出生の数は減少しています。予想されるのは将来に親になるべき若者の数の劇的な減少です。若いカップルの14-15%は生殖能力がありません。

農業生産は継続されている上に、以前汚染された区域として農業用に閉鎖さ

れていた地域も現在は耕作されています。

土壌から続く放射性核種の連鎖は人間のところで終わりますが、放射能が生命にとってよい結果をもたらすことを見た人はいないでしょう。限定された医療用途を除いては。

公式には、チェルノブイリの危険性についてはだいぶ前から話されることはなくなりました。その代わりに原子力エネルギーの安全性と低コストに関する甘い話が大まかに話されています。解き放たれた原子のエネルギーは破壊の連鎖を引き起こします。その反面、人々の間に隣人愛と連帯の連鎖を引き起こし、我々を死から守ってくれます。

心の大きな痛みと共に私たちは福島事故による悲劇のニュースを受け取りました。人口密度が高くて、美しい日本の中心部に、「疎外と移住のゾーン」が誕生するのを想像するのは困難です。この事故の影響を少しでも軽くするためには、地球上のすべての人の助けが必要です。どのくらいのお金がかかるでしょうか。どれくらいの人命が犠牲になるのでしょうか。被害は増えるでしょうか。これだけの犠牲が払われながら、それでも安くて「平和な」原子力には魅力があると言えるのでしょうか。

私たちの協会「チェルノブイリの子どもたちを助けよう」では、原爆によって焦土と化したヒロシマのアゴラの種子から小さな苗木が育ち、3年目になります。この木は汚染除去後に生き残りました。木の部分は枯れてしまったが、根っこは残ったのです。数年後に芽が出て来て、葉が茂るようになりました。五つの種子を日本の「かけはし」の友人たちが持って来てくれました。種子を蒔くと、芽が出たのです。冬になると葉がすべて落ちてしまったので、枯れてしまうのかと心配しました。春になると、また細い枝から芽が出て、緑の葉になりました。

私は本当にこれらの木のように、世界の人々が、核エネルギーという甘い眠りから、本当は悪夢から、目が醒めるのを見てみたいと思います。本当に目が醒めれば、この地球上において生命は生き延びられるという希望が叶うでしょう。

(福澤啓臣訳)

2017年1月31日